

# 黎明の坂 (二)

増田祐美

黎明の坂 (二) 目次

鞍馬

鎌倉軍入京

奥州下向

一の谷

平泉

春宵

鹿の谷

頼政蜂起

再会

木曾殿

## 「鞍馬」より

長成邸のある通りより一本西の東洞院大路を北上して京の街を離れ、深泥池を東に見て狭い谷間を抜けると、岩倉盆地に出る。さらに北へ進んで北山の山間部に入り、市原野を過ぎて、貴船川と鞍馬川の合流する地点が貴船口である。ここから道を左に取れば貴船神社へとつづく道、右へ二里ばかり進むと鞍馬寺に着く。

この道を、牛若はどれほど往復したかしのれない。

鞍馬へ通うようになって四年、華奢だった牛若の体は随分逞しくなった。ただ太い首も、肩や腕の強い張りも、常磐の血を濃く引いた色白のきれいな童顔と不釣り合いで、何だかおかしい。

時は承安三年（一一七三）の、秋も深まる夕刻――。

牛若は先ほどから、東光坊の庭に面した一室で写経していた。東光坊は、牛若が鞍馬寺にやって来た時に預かってくれる、義朝の祈りの師であった阿闍梨蓮忍のお坊である。

鞍馬寺の大門をくぐってすぐ、鞍馬寺が御所から鎮守社として勸進した由岐神社がある。祀られているのは、矢を入れて背に負う鞆で、世の平穩を願う。この由岐神社から先が、清少納言が『枕草子』に近うて遠きものとして書いた、鞍馬の九十九折である。参道はうっそうとした杉木立のなかを幾重にも折れ曲がって本堂まで登ってゆくが、牛若のいる東光坊は由岐神社からほど近いところにあった。

牛若は鞍馬へ来ると、明るいうちは経や書物を読んだり、文字をさらって過ごした。武芸の修行は日が落ちてからである。鞍馬寺別当（首長）を務める蓮忍が了承しているとはいえ、どこにどのような目があるかわからない。義朝の遺児が武芸を磨いていると知られば最後、平氏一門の人々が牛若斬首を叫べば、清盛と雖もこれを押しとどめられないのは明らかであった。

修行に使う場所も、本堂からさらに山奥へ入り、貴船神社へと抜ける途中の僧正が谷であった。杉の巨木が生い茂って昼なお暗く、夕日西に傾けば物の怪喚き叫び、天狗が飛ぶと恐れられたところである。

牛若は徹底的に鍛えられた。師を務めたのは頼政の郎党たち。それに義朝の乳母子鎌田政家の遺児で、平治の乱の折に都落ちする義朝一行とはぐれ、洛北に身を潜めていた盛政・光政兄弟も加わった。

懸命に励んでいたつもりだった長成邸での弓箭の稽古。が、あれはお遊びだったのか、と思えてしまうほど、師たちはこれまでとは別人のように厳しくなった。

「何をやっておるか！ 最後におのれの命を護れるのはおのれのみぞ！」

「おのれに余裕なくば、軍配は振るえぬぞ。配下を皆殺しにするつもりか！」

師たちの怒号が飛び、木太刀が容赦なく牛若を襲った。だが、涙が流れることはあっても、牛若は辛いと思つたことはない。むしろ、それだけ期待されているのだ、と心躍った。

生まれ持った身体能力の高さと勘のよさ、一を聞いて十を悟る賢さに、倒されても倒されても必死に食らいついてゆく粘り強さ。そして優れた師。そのどれれひとつが欠けても、芸というものはものにならない。

## 「奥州下向」より

寒月が冴え返っている。  
その影を受けて濡れたように光る透廊から見ると、師走二十日過ぎの船岡邸の庭の佇まいは、静かに趣深く、さながら一幅の絵のようである。

「ほう……」

長成に伴われて寝殿へ向かう途中のこの透廊で、しばし立ち止まったのは頼政。先ほど福原の清盛邸から戻ったばかりだが、疲れが一瞬にして吹き飛ぶようであった。

「さ、どうぞ」

長成が妻戸を開いた。ここにも旅の疲れを忘れさせてくれる美があった。  
匂やかに平伏して迎える常磐に、「遅く申し訳ない」と頼政は謝った。

常磐は、清盛の夕霞亭に置かれていた時にも、正月は船岡邸で迎えていた。それは長成に嫁いでもからもつづいており、今年も残すところ十日を足らずとなって、船岡へ来ていたのであった。

「とにかく早く話し合いたいと思ひましてな」

「お疲れでしょうに、かえって申し訳なく存じます」

「何の、大事な源氏の子らのことを考えると、まだまだくたばってはおれませぬわい。お、牛若もおつたか」

「某のために御足労いただき、忝のうございます」

「気にせぬでよい。そなたのためは、すなわち我らが源氏のためでもある」

頼政は、にこ、と笑って、長成の隣に用意された円座に腰を下ろした。

「いや一昨日、急に相国殿によび出されましてな……」

頼政は、清盛から聞かされた牛若の処遇について語った。

「——えつ、奥州に？」

常磐は頬に手を当て、言葉を失くしている。

「そうです、と頼政はうなずいた。

「牛若を平泉の藤原氏に預けてくれ、と相国殿は言うのです」

「確かに牛若をしばらく京から離れたほうがよいとは思いますが、だが、何ゆえそのような遠い地に？」

常磐の様子を気にしながら、長成が問うた。

「まあ、執拗な時忠からなるべく遠ざけたほうがよいということもありましょう。だが真の理由は、奥州を繋ぎ止めるため、ですよ」

「どういうことですか？」

「つまり、ゆくゆくは平氏と藤原氏の交渉に当たらせようというのです」

「では、基成と同じ役を担わせる、と？」

「左様。これは重責ですぞ。平氏の将来がかかっていると云っても過言ではない」

奥州が武家にとって重要なのは言うまでもないが、かの地は平氏にとって特別であった。

その理由が黄金であることは、すでに何度か書いた。宋から日本へは宋銭のほか、陶磁器、絹織物、書籍、薬品、香料、絵画などが輸入され、日本からは金、真珠、銀、銅、硫黄などの鉱物のほか、日本刀、蒔絵、螺鈿、屏風などの工芸品が海を渡った。なかでも金や砂金は決済にも使われる重要輸出品であったから、平氏は奥州を繋ぎ止めることに力を注いだ。三年前の嘉応二年に、後白河院を動かして三代目の現御館秀衡を鎮守府將軍に任じたのもその一例である。

〔奥州夷狄秀平（原文ママ）を鎮守府將軍に任ず、乱世の基なり〕

右大臣兼實は『玉葉』に記している。都人にとつて、千里の外の奥州の住人は、たとえ藤原秀郷公の血を引こうとも、莫大な財を成していようと、野蠻人であることに変わりはない。そんな者に都のありがたい官職を与えるとは、と兼實たちは憤慨したのであった。

だが清盛は因習に囚われず、実を取った。麾下となる郎党が増えれば、それだけ分け与える土地が入用になる。それも耕作可能な土地でなければならぬ。だが国土狭き日本の、それが可能な割合はまことに少ない。

では、どうするか。と、じつと考えていても、海外進出でもない限り土地は簡単に増えない。だが、その労は避けたい。そこで交易によつて「財」を増やし、土地に代えて分け与えよう、というのである。

## 「平泉」より

王家が大和に朝廷を置いて日本国の統一を目指した頃、王家一族は自ら剣を抜いて戦った。

公家の大半を占める藤原氏の祖中臣鎌足は、中大兄皇子を助けて律令の朝廷を開くために、おのが手を血で染めた。

悲壮な決意で武器を手にした先祖があつたからこそ今の朝廷の繁栄があることを、連中はどれほど実感しているのか。九郎は首を傾げざるを得ない。

血の穢れと死の穢れを伴うとして、とうの昔に自ら鎧を放棄した連中だ。それで完全に戦うことも止めたのなら文句はない。だが実際は、おのれの代わりに武家を戦わせた。おのれは安全な場に身を置きながら、武家を使つて各地の所領を治め、政敵を倒し、おのが気の済むままに国を経営することに邁進してきたのだ。

（奴らに何がわかる）

いざとなれば死と隣り合わせの戦場に鎧を纏つて立つ覚悟があつてはじめて、先祖が流した血と汗と涙に思いを致すことが出来る。あるいは先祖のために犠牲となつた多くの者たちの辛苦がわかる。それによつてまた、おのれが多くの人々に生かされている、現世の人々の営みのうえにおのれの生活が成り立っていることに気づき得る。違うか――。

九郎は平泉の街を見下ろした。ほぼ中央に、秀衡が宇治平等院の阿弥陀堂を模して建立した無量光院がある。翼廊を左右に長く伸ばし、池に浮かぶように建てられた壮大な寺院だ。

宇治平等院は、源融の別荘であつたものを藤原道長が買い取り、道長の遺言によつてその嫡男頼通が寺として創建したものである。以来、摂関家の人間はことあるごとにここを訪れ、おのれの加護と国家鎮護を祈つてきたが、この寺に摂関家の氏長者はひとりも葬られていなかった。

古来藤原氏の墓は宇治木幡にあり、いくつもの陵墓が築かれている。道長の代に一族一門の供養のために淨妙寺が建てられ、墓参の慣習も生まれたが、そこはあくまで先祖を供養する場所であり、来世の御利益と国家安泰を祈る宗教儀式は、地上の極楽たる平等院や、東大寺を凌ぐかといわれた壮麗な大寺院法成寺などで行われたのである。そこには、変わり果てた姿となつた先祖はいない。美しい御姿の阿弥陀如来が神々しく輝いていられるばかりである。

過去に足枷されて国政を押し進められないのは困るが、過去を顧みることなく立てられた政權ほど、民に冷たくまた危ういものはない。為政者たるもの、今の繁栄も、阿弥陀如来に來世を祈

り得るのも、過去があつたればこそ——そう常に思い起こすが肝要だ、と九郎は思う。

(その点、平泉は見事だ)

ここを治める者は、金色堂に向かつて頭を垂れるたびに清衡を思い、その志に思いを致す。そうすることで、犠牲になつた者たちに思いが及ぶ。彼らの死を無駄にしてはならぬ、と奥州をさらに平安に経営することを誓う。清衡はおのが遺体を彼らの中心に据えさせて、為政者の心を常に過去に通わせることに成功したのだ。

「多くの犠牲のうえに今日の我々がある」

九郎は忠衡の言葉をゆっくりと繰り返した。

「だがそれと同じく、いやそれ以上に大事なことは、為政者は今生きている人々によつて生かされているというを噛み締めることだ。みちのくの藤原氏も、みちのくの民あつてもの」

忠衡は大きな目を九郎にひたと当てている。

落ち込んだ。

文を書く気力もなくなつたまま、空しく時が過ぎる。光政の言うように押しが弱いのかもしれない。いや、もしかしたら次なる行動が取れるか試されているのかもしれぬ、と思った。

(ならば)

瓊壽にとつて、あの至極の瞬間を共有したこの意味は何だったのかを問うてみよう。あの瞬間が、九郎の心にその優しい心を沿わせてくれた結果として生まれたのではないのなら、きつぱり諦めがつくではないか。

言葉は要らぬ。もう一度、かの女の前で笛を吹いてみればわかる。瓊壽が歌うか否か——。

白い顔が消えてから、やけに時が過ぎた気がする。鼻息荒くやつて来たくせに、九郎はもう弱気になっていた。

笛の音も湿り気を帯び、霞んでくる。

(やはり無理か)

九郎が固く目を瞑った時、ついに待ち焦がれた音が流れて来た。

生気を取り戻して清らに澄む九郎の笛に、瓊壽の華やかな箏が絡む。九郎の笛が狂おしく恋うれば、瓊壽の箏は優しく受け止め、九郎の笛が両の腕を広げるところに、瓊壽の箏は飛び込んだ。笛と箏は互いに引き寄せあい、音はひとつに重なって朧月夜に立ち昇つてゆく。

……曲は終わった。

ぼうっ、と九郎は余韻に浸っている。光政が、早くゆけ、とばかりにばさばさと手を振っているが、全身が痺れたように動かない。

と、妻戸から漏れていた細い光の筋が、ふっ、と陰った。

(閉められる！)

途端に九郎は弾かれたように地を蹴って走り、簀子に飛び上がった。

(えっ?)

何か柔らかいものにぶつかつた——と思うや、それは、きゃっ、と小さな叫びを上げた。光が陰つたのは、外に出ようとした瓊壽の体がそれを遮つたのであつた。

「や、済みませぬ」

九郎は驚いて、よろめいた小さな女を抱えた。

爽やかに甘い香気が顔を打つ。

(母上の……)

九郎には懐かしい沈香の香であつた。それに、若い瓊壽の肌の甘酸っぱいような匂いが混じつ

ている。

図らずも九郎の腕のなかつた瓊壽の黒い瞳が、月影を映して濡れている。ごくり、と九郎の喉が鳴った。

「あの……お会いする手立てを思いつきませず、このようなかたちで……」

「遅うございますわ……もつと早くお越しになればよろしかったのに」

あるかなきかに言つて笑みを零した女を、九郎はそつと引き寄せた。素直に預けられた体は華奢に見えてはいても、しつとりとした重みがある。

腕に力を込めれば、切なげな吐息が九郎の耳に熱くかかった。この時の来るのをどれほど願つたろうか。

## 「鹿の谷」より

「はは、そうかもしれませぬ……で、先ほどの話では、俊寛僧都の鹿の谷の山荘で新大納言（成親）殿らが平氏打倒の陰謀を企て、多田行綱殿が密告、関係者が処罰された、ということでしたな」

「うむ、そう片づけられたようだな。だが真相はどうも違うぞ。それに橘次は、新大納言殿が多田殿に頼政殿を引き入れるよう要請したのだから、とやうておつたが、それも違う。ま、橘次がどこまで正確に内情を掴んでおるか、あとで確かめる必要があるが」

そこで九郎はぐつと声を低めた。

「偵諜によると、実はこういうことらしい——」

「何か方策はないか」

後白河院に延暦寺攻めを命じられて困った清盛は、頼政に持ちかけた。すると、頼政も延暦寺攻めに反対だという。

理由は、後白河院が命じた近江・美濃・越前の三国の武士の動員準備であった。それらの地方には、源氏の輩が多い。特に美濃は頼政の息頼兼が纏めており、世人は彼をして美濃源氏と称すほどである。

「もとはといえば院近臣の不始末ではありませぬか」

おのれのかわいがっている臣下が配流されたからといって、後白河院の個人的な復讐のために大事な一族を戦いに駆り出されるのは御免蒙りたい、と頼政は言った。

「猶予はないぞ。何かよい手はあるか」

焦れる清盛に、あれを使いましょう、と頼政は鹿の谷で行われている会合の存在を明かしたというのだ。

「其はまことか——」

「去る夜半に、法皇がこっそりお出かけになるのを我が郎党が気づき、跡をつけてわかったことにございます」

謀議の内容は橘次が話したとおり。ただ、平氏覆滅までは語られず、山門に対して強く出られない清盛を嘲弄していただけであった。

「で、どうする」

「実は我が一族の者が会合に加わっておりまして」  
それが多田行綱であった。

後白河院のお供で鹿の谷へ向かった行綱は、そこで西光たちが臆面もなく平氏を罵り嘲るのを見て驚いた。

このような連中と仲間だと思われては堪らない、どうすればよいか――。

「そう相談を受けまして、これは成りゆきを見守るのにちょうどよい、そのまま会合に参加しておれ、と命じてあるのです。如何でしょう、鹿の谷で平氏打倒の陰謀あり、と行綱に密告させては？」

それでゆこう、と清盛は目の底を光らせた。

「山にとつて最も憎き西光を張本に仕立てるのがよろしいでしょうな」

「おう、連中を一気に引っ捕らえておいて、西光を即日斬ってくれるわ。ほかの奴らには、陰謀を認めれば流罪にとどめてやる、と言つてやる」

「法皇のお取り扱いは、くれぐれも御慎重に」

「案ずるな。院には手を出さぬ」

王権を改変するのは難しい。朝廷内を十二分に工作したうえで、強い武力を背景に有無を言わず実行し、改変成つたのちも、安定するまでは相当な圧力を以て臨まねばならないのだ。

王家の権力が確固たるものとなった平安時代以降、短期間ながらもはじめてそれに成功したが、平治の乱を起こした義朝と信頼であった。

だが言わずもがな、彼らの轍は踏めない。そもそも、今の清盛には朝廷内を工作している暇はないのだ。いやその前に、長らく天皇と院の二元で成り立ってきている王権の、その構成まで変える勇氣もなかった。

かくして延暦寺攻めは、院と院近臣たちの謀反発覚によつて立ち消えとなつた。

延暦寺の大衆は清盛に使者を送り、敵を伐つてくれたことに喜びを示し、もし必要とあらば、一方をお支えいたす、と申し入れたという。

行綱は他の会合参加者の手前、安芸に流されたが、すぐに召還の予定らしい。

「――なるほど」

盛政たちは膝を打った。

「それで、相国殿と殿、双方の間者の報告に齟齬はないのですね？」

繼信が問うのに、うむ、と九郎はうなずいた。

「ならば、殿が陸奥守にお確かめになりたいこととは、一体何でございますか」

九郎は音声を一段と下げた。

「こたび九郎方の間者を務めたのは喜三太だったが、興味深いことを言いおつた」

鹿の谷に集まつた面の重だつた者に相通ずるものがある、という。

「八條院に特に近い、というのだ」

八條院は鳥羽院と美福門院の間に生まれた娘である。近衛帝の次に女帝として立つ話が出たほど両親に溺愛され、膨大な遺領を譲り受けた。その計り知れない家産で多くの有力者を抱え込み、政界に少なからず影響を及ぼしている独身の女院である。

## 「頼政蜂起」より

大広間へ戻る宗盛たちが見えなくなるのを待って、清盛は屋敷のなかを西へ向かった。盟友頼政を死なせた清盛の足は重い。

さまざまなことを、もつとも心落ち着く場所で考えたかった。

飛彈守伊藤景家が手燭を掲げて先をゆく。景家は亡き父景綱に代わって、清盛の在京時には影の如く寄り添っている。

雨はしとどに降りつづき、湿りを帯びた簀子が素足を冷やした。

長らくこの簀子を踏んでいない、と清盛は思った。福原へ居を移してからはめつたに掃落しないうえ、帰っても西八条第の屋敷に入ることが多く、六波羅泉邸では大広間より西に来ることなどまづなかった。

通り過ぎる部屋はどれも静まり返っている。以前これらの部屋の主であった女性たちは、妻の時に従って西八条第に移っていたから、この頃では釣灯籠に火が入られることもなく、屋敷の西半分は闇に溶け込むようであった。

透廊に差し加かって、清盛は視線を足許から前方に転じた。

十間ほど先に、夕霞亭がひっそり佇んでいる。

遣り戸の隙間からは淡く明かりが零れていた。先だって、景家に命じて点させておいたものだ。いとしい女と敬愛する武将父子を感じることの出来る懐かしの間。

「頼政斃る」の報を受け、清盛はこの夕霞亭で、無性に彼らの声なき声を聞きたくなったのだ。跪く景家を透廊に残して、清盛は戸を引いた。

手前の部屋の几張の横に立てられた、高燈台の淡い火が揺れる。と、ふうつ、と清らかに涼しげな香が漂った。

(荷葉、か)

蓮の花の香に通う、といわれる六種の薫物のひとつだ。

夕霞亭は普段から風が通され、蜘蛛の巣ひとつないように保たれていた。ただ、清掃を任された者以外入ることが許されていないため、どうしても、使われていない部屋の持つ独特の冷たさが身を刺す。

明かりを点しておくよう言われて、主が思索に耽るであろうと察した景家が、少しでも空気を和らげん、と気を利かせたのだろう。

(景家め、憎いはからいをしおる)

無骨な男がこのような香を手にするところを見ると、かなり上級の女房に通っているのであろう。

隅に置けぬわ、と清盛は声を出さずに笑って、奥の部屋に入った。

調度品に揺らめく火影が映る。

清盛は円座に座り、部屋を見まわした。

ここに常磐を迎えた時と、何も変わってはいなかった。毎日のように語り合ったあの頃と同じように、義平の腰刀が載っていた棚厨子があり、船岡邸の四季の花が活けられていた白い花壺があった。

清盛は小さなため息をついた。

(四日前か)

頼政が園城寺へ走ったと聞いた時、清盛は我が耳を疑った。

今という時に起つて得る利を、頼政が何と見たかが解せなかつた。  
 (八條院の頼みを断り切れなかつたか)

そう考えるのがもつとも無理がないように思われた。

平氏が政権を握つて腹立たしいのは、どう考えても頼政より王家の者である。平氏覆滅を企てたのは以仁王や八條院。恐らく頼政は、彼らの足となることを強く求められたのだ。頼政は迷い悩んだ末、その忠誠心ゆえに以仁王を援けると決意した——そう考えれば納得出来ないことはない。

だがあの冷静沈着な頼政が、忠誠心のみで一族を破滅させるかもしれない戦いに突き進むとは、清盛にはどうしても考えられなかつた。

(何ゆえ、今、なのだ。頼政)

幾度この問いを繰り返したかしのれない。

(新しき国に向けて、常磐も頼政も力を貸してくれるのではなかつたのか!)  
 声を作らぬ叫びは、体のなかを空しく駆け巡つた。

## 「再会」より

「……全成殿もそうだが、九郎殿のお声も父上によく似ておいでだ」

やつと声に出してそう言うと、頼朝は頬を少しゆるめた。

「お声は父上、お顔は……お顔は継母上に……」

だがもう限界のようであつた。頼朝の顔が歪んだと思うと、大粒の涙がはふり落ちた。あとからあとから溢れる涙を拭いてもせず、幕のなかに集まり来たる武士たちの目も憚らず、頼朝は泣きつづける。九郎の目に映る兄の姿も、たちまち霞んで見えなくなつた。

すでに文は交し合っているが、はじめて会うに等しいふたりである。頼朝は襦袢にぐるまれた九郎しか知らず、九郎に頼朝の記憶はない。そのふたりの隔てられた二十年を一気に縮めたもの、それが常磐の存在であつた。

頼朝の実母であつた由良の一周忌が済めば、常磐は晴れて正室となる筈であつた。だがそれは、残念ながらその日を二か月後に控えて起きた平治の乱で流れてしまったのだが、常磐は由良が亡くなつて間もなく、一門の人々から北の方としてもなされるようになっており、頼朝にとつても尊重すべき継母となつていた。また由良の死後、三日にあげず船岡邸に招いて何かと構つてくれる常磐は、頼朝には実の母のように頼れる大事な女性であつた。

それは伊豆に流されてからも変わらなかつた。

京から頼朝の許へ、早い時期には成親、今は光能から連絡が届くが、そのほかにも報せを寄せる者は多々あつた。なかでも頼朝の乳母の甥であつた三善康信は月に三度も使者を送つており、常磐は屢その使者に文を託して頼朝を氣遣つた。

文ばかりではない。四季折々には、唐櫃に色目美しい狩衣や指貫をはじめ、香木や香炉、金銀の砂子を蒔いた色紙などを詰めて贈つた。これら常磐の優しい心や都の雅な香りに、はじめての土地で心細く明かし暮らす若い頼朝はどれほど励まされたかしのれない。

また九郎も、おのが母が如何にこの兄を大事にしているかを知つていた。となれば、ふたりに言葉はいらない。互いの濡れた瞳のなかに、ふたりが慕う女の笑顔が浮かべば充分であつた。

何も語らず、見詰め合い涙し合う兄弟の姿に、東国の武士たちの袖も濡れた。やがて兄が弟の手を静かに取った時、すすり泣きの渦は号泣の嵐に変わった。といってこれは、彼らが単純に兄弟愛に感動したからではない。

以仁王の宣旨は各地の源氏に伝えられた。よつて、甲斐の武田信義や安田義定、信濃の木曾義仲などがすでに蜂起しているのであり、上野の新田義重、常陸の志太義憲や佐竹秀義なども自ら起つ動きを見せている。

そのなかから「頼朝」という札を、今ここにいる者たちは選んだ。それは頼朝がほかの誰より早く平氏目代を攻撃したことよる。これに上總廣常や千葉常胤といった平氏目代に利権を脅かされていた在庁官人が賛同、反平氏の象徴として頼朝を擁立し、さらにこれら有勢の動きに武蔵の江戸重長、河越重頼、畠山重忠、熊谷直實などが、頼朝を「源氏棟梁の最有力候補」と見て参集を決めるに至った。また、これまで中央と強い繋がりを持ってきた者たち、なかでも源平の武家と提携し、その権威を背として近隣との対立抗争を優位に進めてきた在地有力者にとつて、頼朝が元服直後に右兵衛権佐うひょうえんすけに補任されており、将来の公卿入りを保証されていたと言つてよい貴種であることも魅力であった。

だがその一方で、

——果たして頼朝で正解だったのか。

と、彼らは不安に駆られていた。そのゆえ、頼朝は未だ賊徒の汚名を解かれずにあるうえ、武田や新田らと違つておのれの勢がないばかりか、長たる貫禄もなかったとなればうなずける。

昨日の友を今日は敵にしても、氏と所領を次代に繋ぐことを人生最大の目標とする彼らに、滅びはあつてはならないのだ。

末法思想に支配され仏教的無常観が深まった時代ではあるが、花鳥風月のみならず身の滅びにも美を感じると言う者があるとすれば、もしそれが武士を名乗っているならば、その者は戦いの実際を知らぬ貴族化した名ばかりの武士であろう。そもそも、この時代の真の武士には死を美しいとする思想はまずないと言つてよい。というより、江戸期に書かれた『葉隠』の有名な一節「武士道といふは死ぬことと見つけたり」——本来は死ぬことを恐れて為すべきことをしないのを戒めたもののだが——を以て、戦つて死ぬこと自体が美化されたのは近代のほんの一時期だけであつて、それこそ大和朝廷から江戸の末までの武士には、生き恥を晒すことを拒んで自害する、また切腹の場でも取り乱さず、腹を掻き切つて表情ひとつ変えないといった、つまり、見苦しい死にざまを見せたくないという美学はあつても、それは死にゆくことそのものを美しいとするものではまったくなかった。

平安末期の、ことに中央政権の秩序の及び難い東国で、死と隣り合わせの自力救済の日々を生きて来た彼らである。負けが決して逃げることなく、我が身我が一族の、胸の鼓動が最後の一回を打つまで敵に對しつづけて死にゆかねばならぬこともあろう。

だが彼らにとつてはあくまで勝つことが美しいのであつて、身が滅びることもまた美しい、とは露ほども考えはしない。一旦いくさがはじまれば、酷暑極寒をもとませず、親の屍しなを子の骸むくろを乗り越えても勝利はもぎ取るべきものであつて、そのために組む相手を選ぶに情を挟んではならず、時には冷酷に切つて捨てねばならなかった。頼朝を選んだ者たちも、そうして勝ち残つてきたのである。

頼朝が今度の追討宣旨で名指しされているということは、平氏は頼朝が反平氏勢力の核になると見ているのであろう。だが東国での頼朝の位置づけは、今のところ各地に起つ源氏のひとりに過ぎない。

それに平氏本隊との初対決において、頼朝は華々しい勝利を挙げるところか、実際に敵を走らせたのは武田軍、となると、今後は頼朝より武田の大将の名のほうが中央で重みを持つようになるかもしれないのだ。

東国武士としては、より強い権威を後ろ楯としたい。今朝、富士川のほとりまでやつて来た時

にはすでに対岸に敵の姿はなく、戦わずして得た勝利の余韻に浸る甲斐源氏の大軍を見れば、權威の乗り換えを囁く声が聞こえて来るのは当然であった。

そこへ弟が来るという。  
嫡男とされた三十三歳の頼朝からして、二十二歳のいくさを知らぬ若者が如何ほどのものぞ、と思つて見てみれば、その身に纏う気は兄に比べてより父義朝に似、一見で人を惹きつける魅力と、威風溢れる態度に大将としての資質が感じられる。

——この弟、只者ではない。

そう武士の勘が読み取った時、彼らの目の前で果たされた兄弟の再会は、素晴らしく劇的なものとなったのだ。九郎も義朝の子、しかもこれほどの男なら独自で蜂起することも出来た筈。それをこうして兄の許へ駆けつけたとは——。

## 「鎌倉軍入京」より

鎌倉軍は勢多に参集しつつかある。

京武者はことごとく敵方にある。

平氏はどうも入京しそうにない。

「どうするっ」

義仲は腹心たちに諮つたが、彼らの意見を聞くまでもなく、生き延びて再起を図るのならば、実は取り得る道はひとつしかなかった。

——本拠地へ引き揚げる。

ことである。後白河院を伴えるならそのほうがよい。無理ならば捨ててゆけばよい。それも、一日でも一刻でも、早ければ早いほどよい。

義仲にはそれがわかつている。いざとなれば北陸へ退く、と決めている。だからこそ、京武者のなかで、袂を分かつたずにいた山本兵衛義經を北近江に差し向けて、かの地から若狭、北陸道に至る地域の掌握に努めさせているのであり、年末の除目で彼を伊賀守から若狭守に遷任させたのである。

以前の義仲なら、迷わず京をあとにしたに違いない。だが今の義仲は、九郎が懸念したとおりに、都で手にしたあらゆるものへの未練を断ち切ることが出来なかった。

そのうえ義仲には、ここで都を捨てて賊徒の身に逆戻りすれば、おのれを信じて支えてくれる者たち、また戦場の露と消えていった者たちに申し訳ない、という思いもあった。

素朴で人情に溢れ、義理堅い南信州人に囲まれて育った義仲である。自ら敗北を宣言するに等しい都落ちを、親しき者たちに強いることなどとても出来ず、親しき者たちもまた、情けある主にあまりに忠実であり過ぎた。

何ら手を打てぬまま、無駄にしてはならない筈の時間が刻一刻と過ぎる。あつという間に一日、二日と暮れてゆく。

## 「一の谷」より

古山陽道は塩屋から日本最古の厄除神社多井畑八幡宮まで北上すると、弧を描くように南東へと向きを変え、多井畑峠を経て福祥寺、通称須磨寺へと至る。この須磨寺から西の鉄柵山の麓までの台地は上野とよばれ、須磨寺の山号もこれによって上野山とする。

途中、多井畑八幡宮で戦勝を祈願した一軍は、須磨寺の境内に入って小休止した。

寿永三年二月七日は新暦の三月二十日、日の出は卯の刻の、細かく言えば三刻（六時十分ごろ）、夜明けは遡ること約半刻の卯の一刻（五時二十分頃）になる。須磨寺を出てから鉄柵山の麓まではゆるやかだが上り勾配であるため、台地の下部に陣を敷く敵に姿をさらす恐れはないが、小松明しか焚いていないとはいえ五百騎がゆけば、月の沈んだ暗い空にわずかでも光は映ろう。よって暁の光を待ち、一軍は一の谷を見下ろす地に至った。

見上げれば浅縹色の空、その下では、鈍く光る波を抱えて横たわる紺青の海が徐徐に色を薄めてゆく。右手は鉢伏山が大きく迫出して城戸も垣楯とされた船も隠しているために、ほのぼのとのどかな春の海の夜明けである。

明るくなつて来ると、駆け下りようとしている地形も次第に明らかとなった。

出だしは少しきつい傾斜である。うえから見れば崖というのではないが、浜の平氏軍の目には絶壁と映っているであろう斜度である。この坂から真南に、海までの最短距離をゆくとなれば最後三分の一ほどでまた急坂となるが、一軍の目標地点は南西方向の一の谷であるから、ここからは台地を斜めに下る格好となる。馬に乗り慣れてはいても整備された馬場での流鏑馬や笠懸なら、その騎馬術が競技の域を出ないであろう平氏軍はいざ知らず、鎌倉軍に席を置く者なら誰しもが下れる程度の坂だ。ただ出だしの急坂と、途中の谷筋越え、それに松林を縫いつつ全速力で馬を駆けさせなければならぬとなると、確かに技術が要る。

これらの情報を間諜から聞いた九郎は、日頃から平地の少ない三浦半島を駆け巡っている義連を大将に持って来た。恐らくかの男には平坦な地をゆくのと変わらぬほど易しい坂落としてであろう。そして馬には先頭をゆくものの動きにつづく性質がある。

## 「春宵」より

「諸行無常、奢れる者は滅びる運命にあるのでしよう」  
重衡は自嘲気味に微笑んだ。

「漢は魏に滅ぼされ、魏は晋に倒された。大陸に隋も唐もすでになく、今は宋が金に脅かされております。そこで貴殿にひとつお伺いしたい。前から感じておった疑問ですが、大化の年号が付されて五百五十年、良くも悪くも公家が先導してきた日本国のあり方を、貴殿は変えようとなさっている。法皇を押し込めて覇を握ろうとしておった男を父に持つ某が言うのも如何かと思いますが、たとえ新しき世を立て得たとしても、大陸の例に照らせばいずれ滅びるということになりましょう。その無常を思った時、虚しくお思いになりはしませんか。勝者が勝者でありつづけ

得ぬこと御存じの貴殿が、それでもなお新しき世を立てようとなさる、そのお力はいずれより湧き出すのです?」

「諸行無常。そうおっしゃいましたが、奢れる者の滅びるのが無常なら、替わって新たな覇者が生まれるのも無常。諸行は無常、つまり森羅万象は常住でないがゆえに、滅びるものあれば生まれるものがある。人の生き死にも同じこと、死に別れる寂しさも新たな命に出会う喜びも、まさに諸行が無常であることによって生じるもの。国に置き換えても同じです。勿論、我ら兄弟が立てる世も、いずれ次の者に取って代わられるでしょう。なれど我らが立てるは武家の政權、これを奪うにはそれに打ち勝つだけの武力がなければならぬ。となれば、取って替わるのもまた武家でありましょう。あるいは武家に担がれた公家かも知れませぬが、それは結局、実力ある者が政を司る世に変わりはない」

九郎は、にこ、と皓い歯を見せた。

「諸行は無常であるがゆえに世を変えられる。一歩ずつでも思う世に近づけられる。さらに力ある者によって、さらによき世を創ることが出来るのです。違いましたか。諸行が無常でないのなら、某も多大な犠牲を払って起ち上がろうとは思いません。無常なれば、この身も明日は儚くなっているやもしれぬ。だが明日という日に、昨日までは考えられもしなかつた前途が開けぬと限らぬ、ならば進むよりないではないか——某は常にかように考えておるのです」

「なるほど……いや、恐れ入りました」

そう言ったきり言葉をなくして、重衡は眩しげに九郎を見詰めている。

九郎とて、すべて世はあとの白波、と悟り切っているわけではない。だが一、二度ばかりいささか勝ち、朝廷との交渉を有利に進めたからといって、その時々々の成果に酔い痴れておのれを見失い、身は岸の額を離れた草に似たることを忘れるような者では、今までにない国家改革を成すことは出来ないことを知っている。